

編集後記

世の中には「誰かをスタートラインに立たせる仕事」がある。人は自分がスタートラインに立つことばかりイメージするので、そうした仕事はなかなか評価されない。また、それを当然と思うので、誰かのおかげであることを忘れてしまう。たとえば家事労働はその典型だ。その他に、出産、育児、介護などがそうだろう。そう気づいていても、その仕事をするのは自分以外だと思い込むところがある。世の中が分業で成り立ち、どの仕事も他の人のためにあるとすれば、全員が人をスタートラインに立てる仕事をしているにもかかわらず、である。分業も固定化すると不公平につながる。経済発展の段階で一次産品が輸出の主力になると、付加価値の高い工業品の輸出が難しくなることがある。家庭内も同様で、家事労働の負担が固定化されてしまうのだ。かのアダム・スミスは分業の概念で市場のしくみを明らかにしたが、同時に、人がおこなう他者への共感についても考えぬいた。自分をスタートラインに立たせる存在に、共感の眼差しを向ける必要を思う。

(2015年6月H.O.)

経済研究所所報 第18号

2015年9月30日

編集者 「経済研究所所報」編集委員会

〒357-8555

埼玉県飯能市阿須698

電話 042-972-1211

発行者 駿河台大学経済研究所

〒357-8555

埼玉県飯能市阿須698

電話 042-972-1211

印刷者 勝美印刷(株)

〒113-0001

東京都文京区白山1-13-7

アクア白山ビル5F

電話 03-3812-5201
